

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～KJ法・・・川喜田次郎さん・・・って知ってる？・・・～

文化人類学者、地理学者の川喜田次郎（KAWAKITA JIROU）さん。総合的な学習や総合的な探究の授業でやったこともあるかもしれませんが。KJ法（狭い意味でのKJ法とは、現場で取材されたデータをラベルに記入することに始まり、それらのラベルを「グループ編成」を通じて統合・図解化し、叙述化（つまり文章化または口頭発表）へと至る、一連のプロセス）の創案者です。

ヒマラヤ山村の環境保全と活性化のために設立したNGO〈ヒマラヤ保全協会〉の活動でも知られおり、マグサイサイ賞（1984年）、福岡アジア文化賞（1993年）を受賞されています。



ぼくのやった技術協力なんて、住民の中に眠っていた夢を引き出しただけです。

あそこに橋をかけたい。この砂漠を緑化したいとか、世界中のどんなところに行っても、明日の現実を夢みない国はないんですよ。

夢というのは、過去の時点で「こうりたい」と願った結晶です。

その原動力がなかったら、何もできやしない。

ぼくはヒマラヤの山奥にロープラインをつけたいと思った。軽量の架線で、草や薪を短距離輸送できる。これは住民のすごいニーズ（欲求）であったわけです。

ところが世論調査と称して、ヒマラヤの山奥の住民にアンケート用紙を配って・・・

「あなたがたが、今、一番必要として協力を求める技術は何ですか？」

と聞いたとします。しかし、住民は・・・

「ロープラインが必要です。」

とは書きません。

理由は簡単です。住民はそんなもの、生まれてから見たこともありません。

そして、アンケート後・・・

「この世論調査（科学的調査）によれば、ロープラインによる短距離輸送の必要性はない（住民のニーズではない）。」

と科学的なつもりで結論づけることになる。

それは真っ赤な嘘だ。その証拠に・・・

「ロープラインというものが日本にはあって、相当安い値段でみなさんの村にもつけることができます、それにより短距離輸送が可能になります。」

と私が口火をきいた途端に

「ワー！そんなものが世の中にはあるのか！」

と、爆発したかの如く燃え上がった。これこそ社会的欲求、ソーシャル・ニーズなんですよ。

「1日1話読めば心が熱くなる365人の生き方の教科書」（致知出版社）



総合的な探究の時間で、情報を収集し、分析し、ソーシャル・ニーズを見つけ出すために「アンケート」という手法をとることが多いかもしれませんが、「アンケート」に答えてもらう人たちの立場になって（忠恕の心で）、その人たちのことを理解した上で、質問も考えないといけなのですね。